2) ハチ・アリ類（ハチ目）

① スズメバチ（スズメバチ科）

ア　対象種

オオスズメバチ等

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

・　大型であること　　オーバチ

・　その他　　クマノバチ、クマンバチ、クワナバチ、クワバチ、ドングリバチ

（※　アカバチ）

オオスズメバチ

エ　生息及び呼び名の状況

夏にクヌギの木の樹液の出た所などでよく見かけられる黒と黄色の縞模様が目立つ大型のハチであり、現在も郡内全集落に生息する。外部からの刺激に対し攻撃性が強く、刺されると死ぬ場合もある。

対象種としては最も大型のハチとされることからオオスズメバチがあげられるが、実態上はキイロスズメバチ等を含んだ呼び名とみられる。

本種の呼び名としては、「クマノバチ」や「ドングリバチ」をはじめ計６種を採録した。

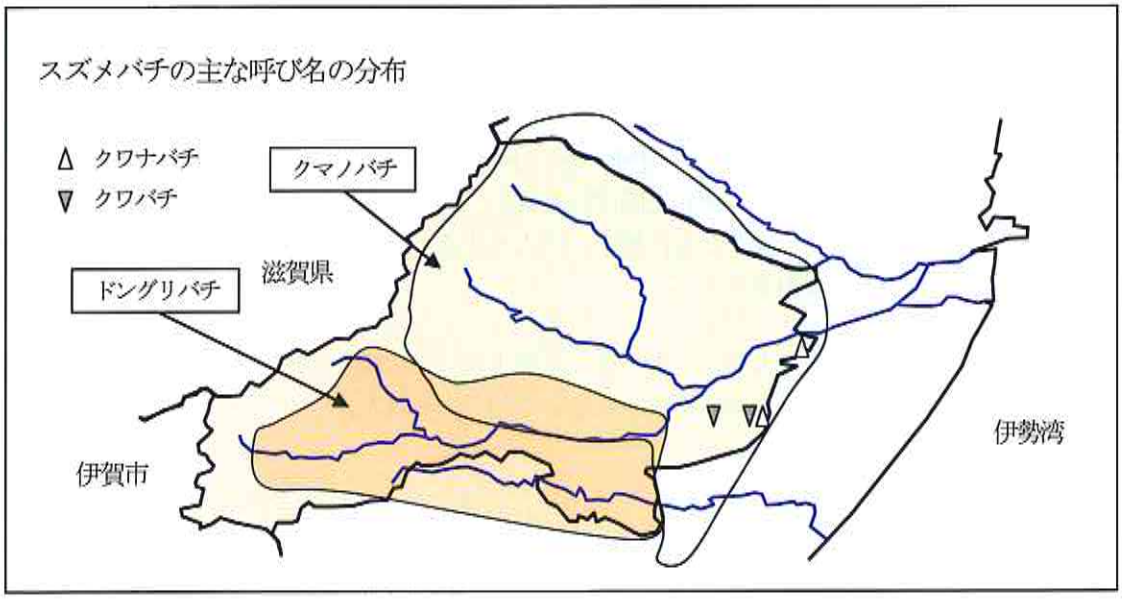
郡内では大きく２つ呼び名の地域に分かれ、郡内の北部・東部を中心として広い地域では「クマノバチ」と呼ばれたほか、郡西部から南部にかけての加太・坂下地区から昼生・亀山地区の鈴鹿川本流沿い及び中ノ川沿いの地域で「ドングリバチ」と呼ばれ、また郡東部の国府・牧田地区の一部の集落で「クワナバチ」、「クワバチ」がみられた。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町では「マンネンバチ」、伊賀市柘植町では「テンドリバチ」を採録した。

オ　その他

アカバチが家に丸い巣を作ることがあり、クマノバチがアカバチの巣を襲うとすさまじい戦いとなり数日でその巣がぼろぼろになるという話や焼いて食べるとうまいという話とともに、本種の攻撃性に関して次の伝承を採録した。

・　「クマノバチの巣に石を投げるな」



② クマバチ（ミツバチ科）

ア　対象種

　　キムネクマバチ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　形　状　　ダンゴバチ

・　羽　音　　ブンブバチ

・　一般的な和名　　クマバチ

エ　生息及び呼び名の状況

　春先にフジの花などでよく見かけられ、花の蜜を吸うおとなしいミツバチ科のハチである。胸部が黄色く目立つ大型で丸っこい体形の生き物であり、現在も郡内全集落に生息する。

　本種の呼び名としては、「ダンゴバチ」や「ブンブバチ」をはじめ計３種を採録した。

　郡内全域でその形状に由来する「ダンゴバチ」と呼ばれた。

　一部の集落でみられた「ブンブバチ」は同様な羽音をたてる他種のハチ類を含めた呼び名であるとともに、聴き取り方によってはより広く採録の可能性のある。

③ 地中に巣を作るハチ類

ア　対象種

　　ジガバチ、クロアナバチ等（アナバチ類）

　　クロスズメバチ等（スズメバチ類）

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　巣　穴　　アナバチ

・　巣場所　　ツチバチ

ジガバチ

エ　生息及び呼び名の状況

　地中に巣を作る、又は地中に出入りするハチ類であり、現在も郡内全集落に生息する。

　対象種としてはアナバチ類やスズメバチ類があげられる。

　本類の呼び名としては、「アナバチ」と「ツチバチ」の計２種を採録した。

　郡内全域で「アナバチ」と呼ばれたほか、一部の集落で「ツチバチ」がみられた。これらは地中に巣を作るハチとともに地中に出入りするハチを含めた呼び名であり、人により対象種が異なったようである。

オ　その他

　他地域から来た人が「アナバチ」を捕まえ、白い紙をつけて飛ばしそれを頼りに巣の所在を探し地中にある巣を取って行ったという話がみられた。

④ その他のハチ類

a) 赤色のハチ類

ア　対象種

キイロスズメバチ

イ　採録した呼び名

・　体　色　　アカバチ

ウ　呼び名の状況

個別に調査対象としなかったが、その他のハチ類としての聴き取りで、赤い体色のハチ類の呼び名として「アカバチ」の１種を採録した。

対象種としてはキイロスズメバチがあげられる。

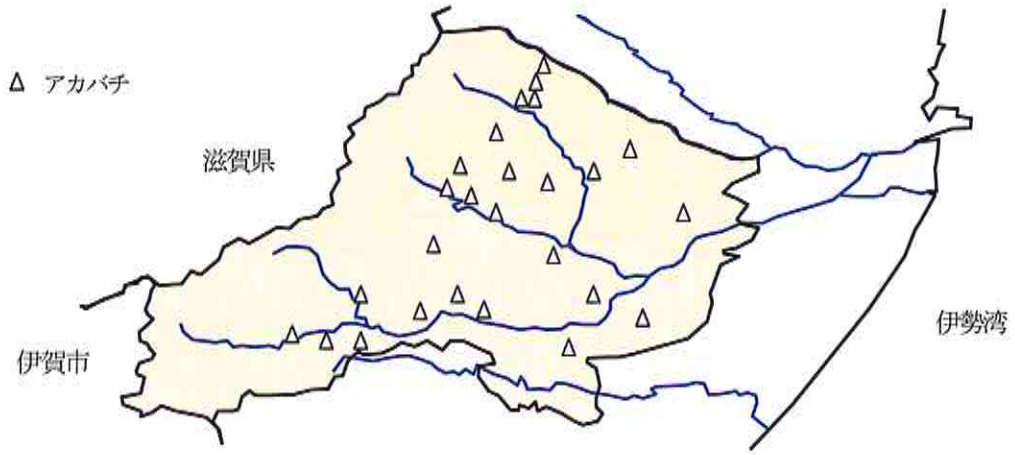
山辺の集落を中心に呼び名がみられ、オオスズメバチ（「ドングリバチ」、「クマノバチ」等）と区別し、それより少し小型のハチが「アカバチ」と呼ばれた。

なお、「アカバチ」は黄色いハチ類を指す「キーバチ」と合わせて採録する場合が多くみられた。

エ　その他

クマノバチとアカバチは石を投げると投げた所に向かってくるという話を採録した。

呼び名「アカバチ」の分布



b) 黄色いハチ類

ア　対象種

キアシナガバチ等

イ　採録した呼び名

・　体　色　　キーバチ

ウ　呼び名の状況

個別に調査対象としなかったが、その他のハチ類としての聴き取りで、黄色い体色のハチ類の呼び名として「キーバチ」の１種を採録した。

対象種としてはキアシナガバチ等があげられる。

山辺の集落を中心に呼び名がみられ、最も大型のものが「クマノバチ」、「ドングリバチ」、それより少し小型のものが「アカバチ」と呼ばれたのに対し、より小型のものが「キーバチ」であるという。

c) 黒色のハチ類

ア　対象種

クロスズメバチ、ミカドドロバチ、クロハバチ等

イ　採録した呼び名

・　体　色　　クロバチ

ウ　呼び名の状況

個別に調査対象としなかったが、その他のハチ類としての聴き取りで、黒色の体色のハチ類の呼び名として「クロバチ」の１種を採録した。

対象種としてはクロスズメバチやミカドドロバチ、クロハバチ等があげられる。

クロスズメバチ

郡内２集落で呼び名がみられ、郡内では一般的な呼び名ではなかったようである。

d) 泥で巣を作るハチ類

ア　対象種

ミカドトックリバチ、ギボシトックリバチ等のトックリバチ類

イ　採録した呼び名

・　泥の巣　　ツチバチ、ドロバチ

・　一般的な和名　　トックリバチ

ウ　呼び名の状況

個別に調査対象としなかったが、その他のハチ類としての聴き取りで、泥の巣に関係したハチ類の呼び名として「ドロバチ」や「トックリバチ」をはじめ計3種を採録した。

ミカドトックリバチ

対象種としてはトックリバチ類があげられる。

郡内全域で広く「ドロバチ」と呼ばれたほか、一部で「ツチバチ」や「トックリバチ」がみられた。

なお、隣接地域として調査を行った芸濃町楠原では「ヒトリバチ」と「イエバチ」を採録した。

e) 不明種

その他にハチ類の呼び名として次の8種を採録したが、ほとんどが種別不明である。

ア　採録した呼び名

・　クソブンブン：堆肥の所にいるハチ

・　チューバチ：中型のハチ

・　ツチバチ：ハエを捕らえるハチ

・　ナガバチ：種別ははっきりとしないが、アシナガバチの省略形の可能性もある。

・　ヌカバチ：種別ははっきりとしないが、他地域でヒメホソアシナガバチの呼び名とされている場合があり、本郡内も同種の呼び名の可能性がある。

・　ハナバチ：花に集まる様々なハチ類の総称とみられる。

・　フトコロバチ、ホトコロバチ：懐に飛び込んでくる小型のハチとして山辺の集落で採録した。しばしば衣服の間に飛び込み、放置すれば何もしないが手で取り除こうとして触ると刺すという。

イ　その他

ハチの巣作りに関して次の伝承を採録した。

・　「軒に蜂の巣ができると、台風がくる」

⑤ アリ（総称）（アリ科）

ア　対象種

アミメアリ、イエヒメアリ、クロオオアリ、クロヤマアリ等

イ　採録した呼び名

・　総称　　アリ、アリマ

・　有翅成虫　　ハアリ、ハネアリ、ハリ

ウ　生息及び呼び名の状況

人家の周囲の地面等で多数見かけられる身近な小型の昆虫であり、現在も郡内全集落に生息する。

大小様々なアリ類が生息し、場合によっては、家の中にまで入ってくることがある。

本類総称としては、「アリ」と「アリマ」の計２種を採録した。

郡内では大きく２つ呼び名の地域に分かれ、郡内のほぼ全域で一般的な和名である「アリ」と呼ばれたが、郡西部の加太地区から隣接地域である明地区の一部においては主に「アリマ」と呼ばれた。

クロヤマアリ

有翅成虫（クロオオアリ）

一方、シロアリを含め翅を持つ成虫の呼び名としては、「ハアリ」や「ハリ」をはじめ計３種を採録した。

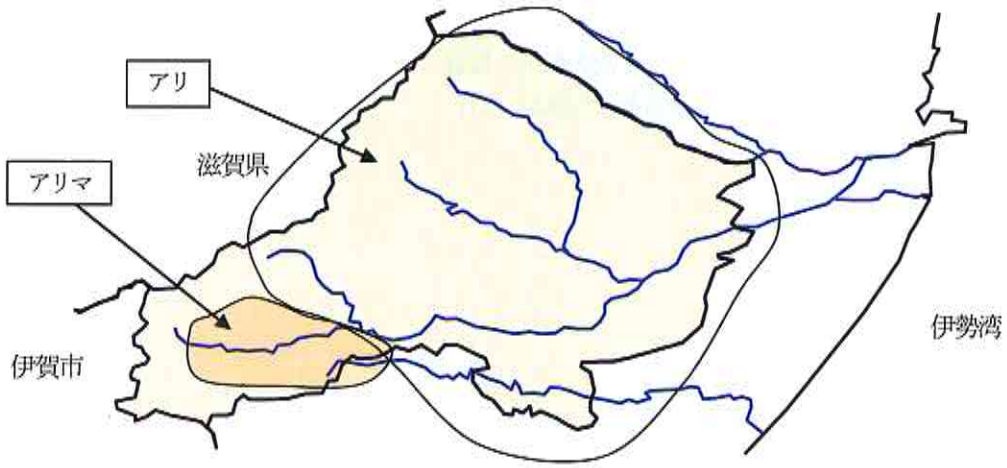
有翅成虫は「ハアリ」、「ハネアリ」のほか、当時の高齢者から「ハアリ」の短縮形とみられる「ハリ」とも呼ばれたようである。

エ　その他

当時の農家などでは、近くの山林から集めた炊飯や風呂の焚きつけ用の柴（雑木の小枝等）が「つし」と呼ばれた家の内部の天井裏やふろ場近くに置かれたことから、その搬入とともに小型のアリが家の中に入り、住人が咬まれることがよくあったという話のほか、本類の動きに関して次の伝承を採録した。

・「アリが行列を作ると雨（が近い）」

アリ（総称）の主たる呼び名の分布



⑥ 家に入る小型のアリ類

ア　対象種

　　アミメアリ、アカイエアリ、ヒメアリ等（推定）

イ　生息情報　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　形状（細腰）　コシボソ、コセボセ、コセボソ

エ　生息及び呼び名の状況

　家中に入りこむこともある小型のアリであり、現在も郡内全集落に生息する。対象種としてはアミメアリやアカイエアリ等があげられる。

アミメアリ

　本類の呼び名としては、「コシボソ」や「コセボソ」をはじめ計3種を採録した。

　郡内全域で「コシボソ」等と呼ばれ、当時よく使われた呼び名であるが、種別ははっきりしない。一部の集落で「小型で赤いアリ」という話があり、アミメアリ等を指すものとみられる。

　当時は炊飯や風呂の焚きつけ用の柴が家屋内の「つし（天井）」や土間に置かれたことから、それとともに人家に入り、しばしば人を咬んだという。

⑦ クロオオアリ（アリ科）

ア　対象種

　　クロオオアリ、ムネアカオオアリ等

イ　生息情報　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　大型であること　　オーアリ、オヤアリ、クマアリ、トノサマアリ、ヤマアリ

エ　生息及び呼び名の状況

　寺や神社の境内などでよく見かけられる頭の大きな大型で黒い体色のアリであり、現在も郡内全集落に生息する。

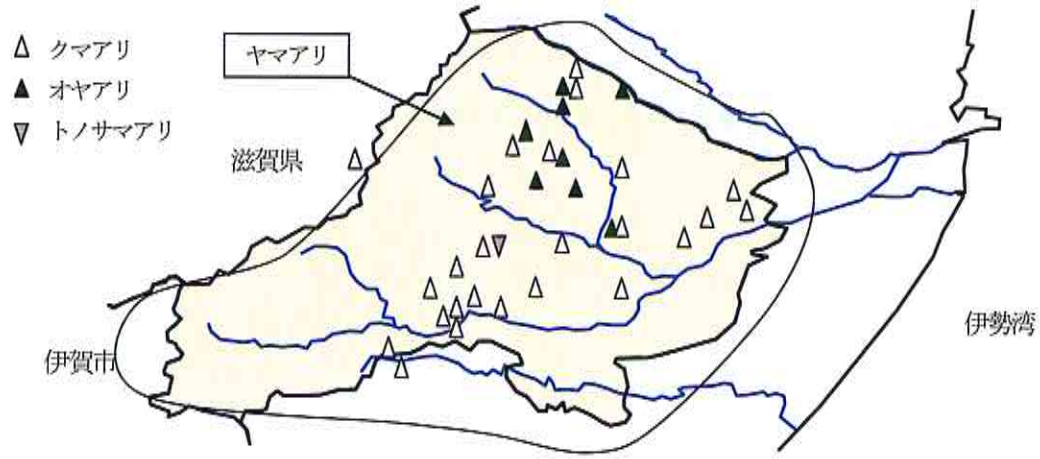
　対象種としてはクロオオアリのほかムネアカオオアリ等もあげられる。

　本種（類）の呼び名としては、「ヤマアリ」や「クマアリ」をはじめ計5種を採録した。

　郡内のほぼ全域で「ヤマアリ」と呼ばれたほか、白川・神辺地区や石薬師地区を中心に「クマアリ」、また庄内地区や椿地区を中心に「オヤアリ」がみられた。

　なお、隣接地域として調査を行った芸濃町明地区では「オニアリ」を採録した。

クロオオアリの主な呼び名の分布



⑧ その他のアリ類等

a) 赤色のアリ類（アリ科）

ア　対象種

　　イエヒメアリ等

イ　採録した呼び名

・　体　色　　アカアリ

ウ　呼び名の状況

　個別に調査対象としなかったが、その他のアリ類としての聴き取りで、赤い体色のアリ類の呼び名として「アカアリ」の１種を採録した。

　対象種としてはイエヒメアリ等があげられる。

　郡内のほぼ全域で「アカアリ」と呼ばれたようである。

イエヒメアリ

b) 黒色のアリ類（アリ科）

ア　対象種

　　クロヤマアリ、クロオオアリ等

イ　採録した呼び名

・　体　色　　クロアリ

ウ　呼び名の状況

　個別に調査対象としなかったが、その他のアリ類としての聴き取りで、黒い体色のアリ類の呼び名として「クロアリ」の１種を採録した。

　対象種としてはクロヤマアリやクロオオアリ等があげられる。

　「クロアリ」は、当時よく使われたという呼び名ではなかったようであるが、「アカアリ」との対比等で、郡内のほぼ全域で使われた呼び名とみられる。

クロヤマアリ

c) その他のアリ類（アリ科）

ア　対象種

　　不明

イ　採録した呼び名

・　ヘータイアリ

ウ　呼び名の状況

　個別に調査対象としなかったが、その他のアリ類としての聴き取りで、「ヘータイアリ」の１種を採録した。

d) シロアリ（※ ゴキブリ目 シロアリ科）

ア　対象種

イエシロアリ、ヤマトシロアリ

イ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　シラアリ、シロアリ

・　有翅成虫　　ハアリ、ハネアリ、ハリ

ウ　呼び名の状況

個別に調査対象としなかったが、その他のアリ類として聴き取りで、白い体色のアリの呼び名として「シラアリ」と「シロアリ」の計２種を採録した。

ヤマトシロアリ

対象種としてはイエシロアリとヤマトシロアリがあげられる。

郡内全域で一般的な和名である「シロアリ」等と呼ばれた。

有翅成虫にあってはアリと同様に「ハアリ」、「ハリ」等と呼ばれ、ともに郡内全域で使われた呼び名のようである。

木造家屋を含め、陽が当たらず湿気が多い部分の木材を食い荒らす害虫であるとともに、山林内では朽木を分解する生き物である。アリによく似た体形に加え白い体色をしており、標準和名にもシロアリという名が使われているが、ゴキブリ類の一種である。

3) ハエ類（ハエ目）

① メマトイ（ヒゲブトコバエ科、ショウジョウバエ科）

ア　対象種

- ヒゲブトコバエ（クロメマトイ）等
- マダラメマトイ、オオマダラメマトイ等

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

- 目に入ること　　メハイリブト、メブト
- 目を見えなくすること　ガンツブシ、メツツキ、メツブシ
- ブユ類と混称　　ブ、ブト、ブヨ、ベト
- その他　　シュー、ブンブン、メセセリ

オオマダラメマトイ

エ　生息及び呼び名の状況

春秋の風のない夕方などに群れて飛翔する姿がよく見かけられる。人が来るとまとわりつき、しばしば目の中に飛び入り一時的に目を見えなくする非常に小さなハエであり、現在も郡内全集落に生息する。

本類の呼び名としては、「ブト」や「メツブシ」をはじめ計12種を採録した。

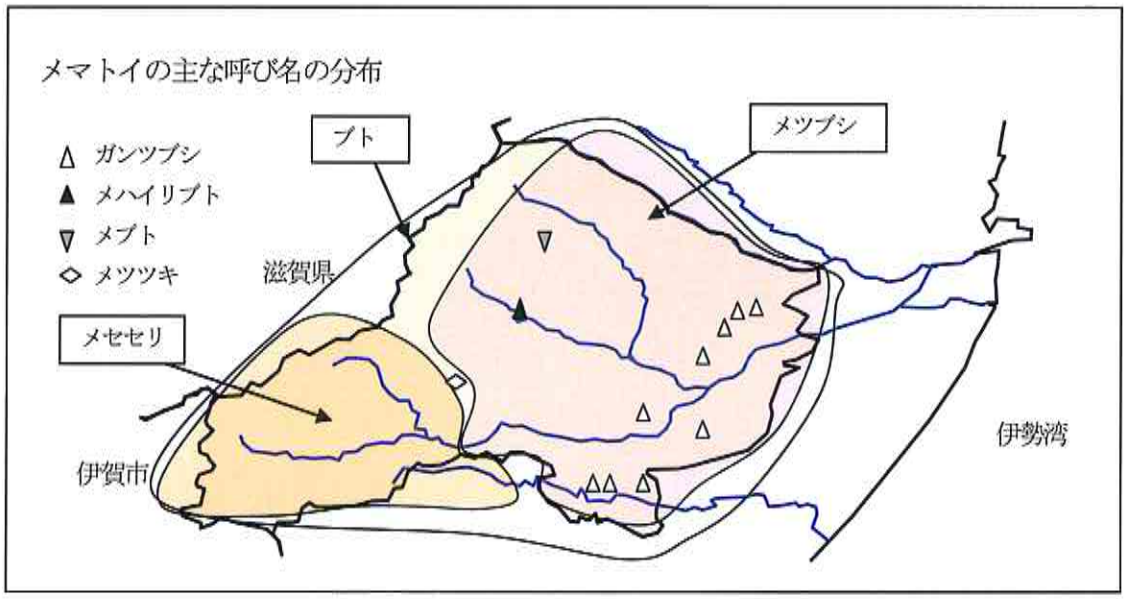
郡内全域でブユ科のブユと同様に「ブト」と呼ばれたが、郡西部の加太・坂下・関町地区では主として「メセセリ」と呼ばれた。

また、目に入り一時的に目を見えなくすることから郡中部以東の広域で「メツブシ」とも呼ばれ、石薬師地区や昼生地区等の集落では同様に「ガンツブシ」がみられた。さらに目に入ることから集落によっては「メブト」、「メハイリブト」等と呼ぶ場合もみられた。

オ　その他

本類の集団での飛翔に関して次の伝承を採録した。

- 「ブトがたくさん飛ぶと雨（が近い）」



② ハナアブ類の幼虫（ハナアブ科）

ア　対象種

ナミハナアブ、シマハナアブ等

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

・　生息場所　　センチムシ、ベンジョムシ

・　その他　　ウナムシ、オナナムシ、オナムシ、ゴラムシ

幼虫

成虫

エ　生息及び呼び名の状況

一般に「オナガウジ」とも呼ばれ、汚水等の中で見かけられる長い尾を持つハエ類の幼虫（蛹を含む。）であり、ハナアブとして花に群れる成虫との生息環境の違いが対照的な生き物である。

当時は郡内全集落に生息したが、現在では下水道の整備や生活スタイルの変化等に伴い身近に見かけることはほとんどない。

本類幼虫（蛹）の呼び名としては、「オナムシ」や「センチムシ」をはじめ計６種を採録した。

当時の生活環境上、住民に身近な生き物であり昔からの呼び名でよく呼ばれたようで、郡内の広い地域で「オナムシ」と呼ばれたほか、野登地区で「ウナムシ」、南小松では「ゴラムシ」がみられ、主たる呼び名として使われていた。

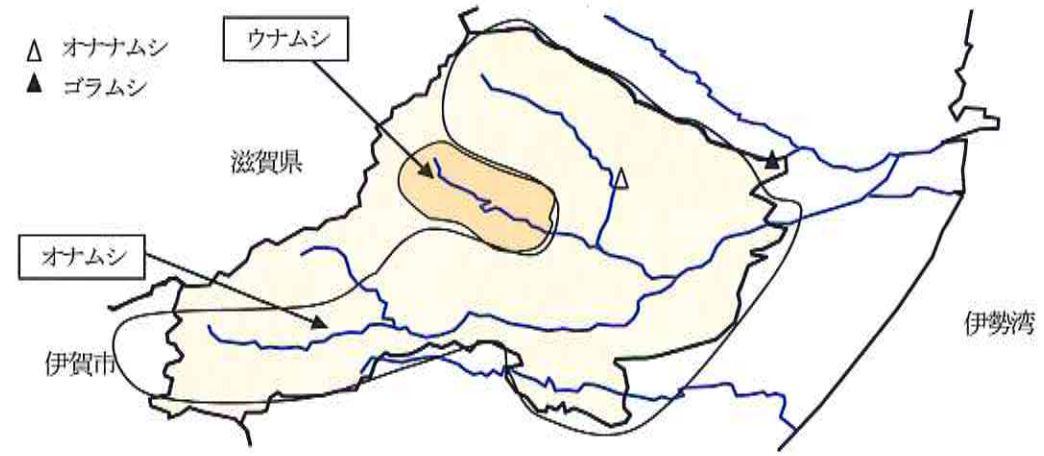
また、郡内全域で「センチムシ」や「ベンジョムシ」とも呼ばれ、一部の集落では主たる呼び名として使われていたが、ほとんどの集落でそれらは便所で見かけられた他の昆虫等を含めた呼び名ともされていた。

なお、隣接地域として調査を行った四日市市塩浜磯津では「ゴナムシ」、甲賀市土山町では「センチムシ」を採録した。

オ　その他

昔はオナムシ、オニアザミの中にいる虫やウジムシでよくシラハヨ釣りをしたという話がみられた。

ハナアブ類の幼虫（蛹）の主な呼び名の分布



③ ブユ（ブユ科）

ア　対象種

　　アシマダラブユ等

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　ブト、ブヨ

・　その他　　シュー、ヒネブト、ブイブイ、ブーブ、ベト

エ　生息及び呼び名の状況

　主として渓流近くや山あいに生息し、刺されるとひどい痒みが伴う昆虫である。

　幼虫は山間部の渓流等水が清冽である環境に主として生息し、成虫となり飛翔し人畜に害を与える。現在では河川の水質の関係から山辺の地域以外ではほとんど被害にあうことはないが、当時は河川の水質もよく、また農耕用に飼育されていた牛などにアブとともについたようで、郡内全集落に生息した。

　本種の呼び名としては、「ブト」や「ブヨ」をはじめ計７種を採録した。

　郡内全域で主として「ブト」と呼ばれたほか、一部の集落で「ヒネブト」や「シュー」、「ベト」等異なる呼び方もみられた。

　春や秋の朝夕に目に飛び込んでくるメマトイも同様に「ブト」と呼ばれたが、それは多くの集落で「メツブシ」等とも呼ばれ、本種と呼び名上の区別がされていた。

オ　その他

　当時の人は蚊取り線香のような本種が忌避する煙を出すものを腰にしながら山に入ったという話とともに、本種に刺された時の痒みに関して次の伝承を採録した。

・　「ヒネブトに刺されるといつまでも痒い」